れきはく通信 第２３号

発行：新潟県立歴史博物館
（編集　高松夏央）
2026 年 10 月 15 日

堀直奇と尺八

令和８年（2026）３月、当館所蔵の「堀直奇像」が新潟県指定文化財となりました。それを記念して当館では現在、秋季テーマ展示「堀直奇の系譜―椎谷藩と村松藩」（９月 19 日（土）～11 月３日（火・祝））を開催中です。

「堀直奇像」は、直奇の還暦を祝い、寛永 13 年（1636）に幕府御用絵師で、17 世紀の画壇を率いた巨匠でもある狩野探幽が描いたものです。直奇の右膝の脇には、刀とともに尺八が描かれています。このタイプの尺八は、竹の節をひとつ含むので「一節切(ひとよぎり)」とも呼ばれています。

直奇は尺八を愛好し、銘管を収集しました。室町時代に活躍した京都・大徳寺の一休和尚が制作した尺八「迎涼草」を愛蔵し、つれづれに吹き鳴らすのを愉しみにしていた、と伝わります。本展では、村松藩堀家に伝わった直奇愛用の尺八を展示しています。その焼印にある銘「宗君」は、「一節切」尺八の中興の祖で、直奇とも交流のあった大森宗勲（1570～1625）と考えられます。宗勲は織田信長に仕えた後、「一節切」尺八の研究に専念し、後陽成天皇の命により５本の銘管を献上するなどした人物です。直奇と親密な交流があったようで、寛永２年（1625）４月 10 日、直奇が城主であった越後国村上において 56 歳で客死しました（『京都名家墳墓録』）。

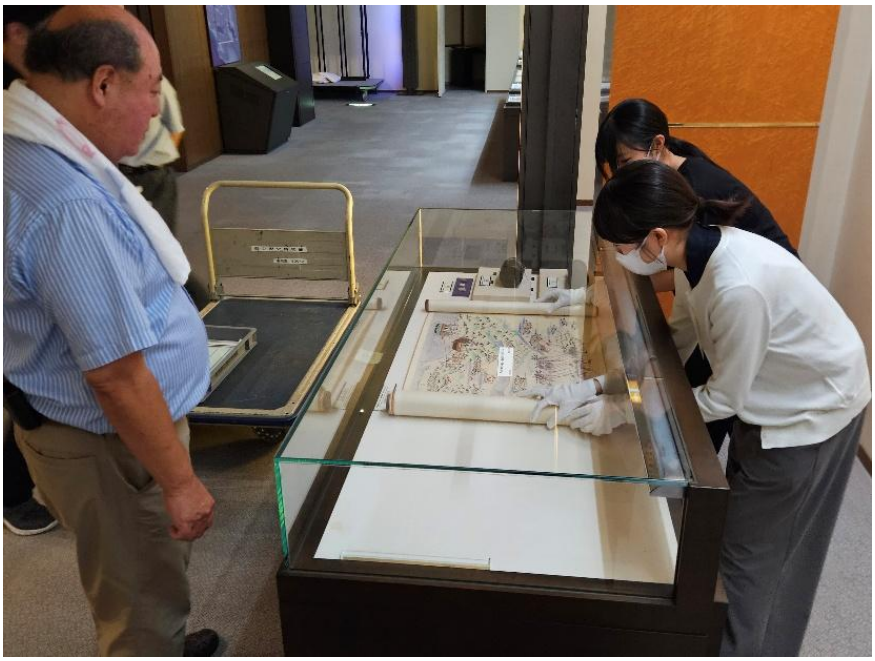


堀直奇愛用と伝わる尺八（当館蔵）

直奇は長岡・村上などの城主を歴任し、各地域発展の礎を築いたことで知られますが、尺八を愛好したような文化的な側面にもご注目いただければと思います。（渡部浩二）

博物館実習という経験

今年度の当館での博物館実習が無事に終わりました。シルバーウィークが始まる 9 月 20 日から 30 日までの計 10 日間、県内外の大学・短期大学から計 9 名の実習生が博物館実習に臨みました。よく「当館の実習期間は長い」といわれることがありますが、実習生の皆さんが学芸員としての基礎を身に着けられるよう、座学・実務を含めて豊富なカリキュラムを用意しています。考古、歴史、民俗の資料の取り扱いをはじめとして、常設展示の入れ替え作業や、小学生への解説・体験講座の見学のほか、来館者の避難誘導を想定した防災訓練にも参加していただきました。さらに、実習生にはグループに分かれて次年度に実施する企画展・テーマ展を 1 つ選び、その展示構成や情報発信のあり方について議論し、発表していただきました。課題の発表時間は 1 班 30 分。はじめは緊張していた実習生も、グループ内でよく話し合い、チームワークを発揮して素晴らしい内容にまとめていただきました。実習を通じて成長していく姿が頼もしく、将来、学芸員になりたいと話してくれた実習生もいて、心から応援したいと思いました。大学卒業後は学芸員とは異なる道に進む方も多いかもしれませんが、実習経験を糧として、これからも、間接的、直接的に博物館に関わっていただけたら嬉しいです。実習生の皆さん、10 日間、大変お疲れ様でした。（永瀬史人）



実習生との常設展示の展示替えの様子

～編集後記～

今月号は、秋季テーマ展示「堀直奇の系譜―椎谷藩と村松藩」にちなみ、堀直奇が愛用した尺八ついて紹介しました。テーマ展示は 11 月 3 日まで開催しています。ぜひ足をお運びいただければ幸いです。

他にも 9 月 20 日から 30 日まで実施された博物館実習についても紹介しました。編集者も実習に打ち込む実習生の姿を見て、懐かしさとともに頼もしさを感じました。

「れきはく通信」は、新潟県地域史研究ネットワークニュースと同報のほか、月末更新となる新潟県立歴史博物館のホームページでもご覧いただけます。お楽しみいただけますと幸いです。

ご意見、ご要望は新潟県地域史ネットワークニュース事務局までご連絡ください。

事務局メール　net@nbz.or.jp